

ずっと独りだった市ヶ
谷有咲が、香澄の大切
な人になる話。

Ryu／RyuTu部

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第二弾、市ヶ谷有咲編。有咲はガルパやアニメのストーリーの中でもなかなか香澄に対して素直に気持ちを伝えられていない…。今回はかすありの原点というか、孤独だった有咲を香澄がその輝きで溶かしてあげてほしいな、と思い筆を執りました。よければ評価、コメント等よろしくお願いします。

P i x i v にも投稿しております。

目次

ずっと独りだった市ヶ谷有咲が、香澄の

大切な人になる話。

1

ずつと独りだつた市ヶ谷有咲が、香澄の大切な人になる話。

この間のあれは、何だ？あの香澄が自信をなくして泣き出すなんて、いつもの無駄な元気さはどこへやったんだあいつは。ただ私は、いつからかあいつのそんな明るいところに、憧れていた。なぜかって？これを読んでいる人が知っているかどうか分からないが、聞いてくれ。

私の両親は、私が物心ついてからすぐに亡くなった。ばあちゃんが言うには、事故だったらしい。詳しくは明かしてくれなかったが、本当に不慮のものだったそうさ。その頃の私はとにかく毎日をどう過ごすか、悲しさをどうやって発散するかで毎日泣いてばかりだった。何をやるにも昔の両親との思い出が、邪魔をして……言い方が少し悪かったな。「これをやったら、母ちゃんは思うかな」「こうしたら、父ちゃんは思うかな」ってな。そんな風に、もう会えない両親との思い出が自分の行動を阻害してしまうんだ。私はそれこそ小中学校まではなんとか無理をして学校にも通つたが、もちろん友達なんてできなかつた。作る気もなかつたからな。でも、高校にはさすがに行く必要があるから、受験は頑張つた。ばあちゃんを、これ以上悲しませたくなかつたんだ。

ただでさえ自分の娘を自分よりも早く亡くしているんだから。

でも、私のそんな暗く孤独な人生は、あいつによつて変えられたんだ。香澄、戸山香澄は、高校に入つてもあまり通わず引きこもりがちだった私を見つけた。正直な話、私はバンド活動なんてやりたくなかつたし、やる資格もないと思つた。だつてキラキラドキドキだぜ？私の人生とはかけ離れた宣言じゃないか…。まあその後、ご存じの通り私は口車に乗せられてバンド活動を始めてしまうのだが。

「なあ、香澄」

帰り道、私はついに素直になることにした。

「なあに？ありさ」

「私を、ポピパに誘つてくれてありがとな」

「え、？」

「私、ずっと寂しかったんだよ。母ちゃんも父ちゃんも死んで、今までの人生、ずっと暗かつた。」

「ありさ。」

「うっ…。お前みたいなの。明るくて輝いてる奴、最初は大嫌いだった。人生に何ん自由なく、悩みなんてないんだろうなって。思つてた」

私は大粒の涙を、柄にもなく流してしまつていた。

「私なんか、お前の目指すキラキラドキドキにたどりつけるのか、最初は不安だった。：うっ：。でも、この間お前が悩みを始めて私たちに打ち明けてくれただろ？その時私は、お前でもそういう気分になるんだって、ちよつと。： ホツとしたというか。香澄も私と同じ、人間なんだなって改めて思ったんだ」

「そりやそうだよ。ありさ、私だってそういう気分になるときはあ、でもね、それを外には出せなかつたんだ。出したら、キラキラドキドキから遠ざかつちやうかもつて。でも、私がそれを始めて外に出したことで、ありさがホツとしたんなら、遠ざかりはしないのかなって、ちよつと思つたかな」

「香澄、なんで私なんかをポピパに誘つたんだよ、いいことないのに、こんな奴、暗くて何もなくて、きつと足を引つ張るに決まつて。：」

「ありさ！こつちに来て！」

「ちよつ！？香澄！？」

香澄は私の手を引つ張り、夕焼けの中を走りだした。ぼやける視界の中、私は赤く染まるこの街を香澄と一緒に走り抜けた。どこまで行くのか、あいつは私をどこへ連れて行くこうとするのかは分からなかつたが、とにかく走つた。

「ちよつと待て、こつこつて蔵じゃねえか」

「ありさっ！」

香澄は、私に抱きついた。いきなりのことで私も動揺したが、香澄は涙を流していた。

「私、ありさのこと大好きだよっ…」

「は、はあ…？」

「ありさはいつも私を助けてくれて、話を聞いてくれて、頭も要領もよくて、私にないもの全部持つてて、すごいなって思う。私が躓いた時とか、立ち止まった時とか、全部ありさがいたから乗り越えてこられたんだよ…。だから、そんな寂しいこと言わないで…。！全部私を受け止める、ありさの悲しさも辛さも、これから一緒に乗り越えていきたい…。！」

「か、香澄… お前…。」

どうしよう、涙が止まらない。これは、悲しさの涙なのか、はたまた嬉しさの涙なのか。私でも気持ちしがぐらついて分からないよ…。

「ありさっ…。今まで、辛かったね…。悲しかったね…。ずっと独りで、でもそれでも頑張ってきたありさは偉いよ。凄いよ！」

「うっ…。か…。すみ…。」

「大好きだよ、誰よりもありさが好き。素直じゃなくて、頑張り屋さんで、いろんなことできて、可愛くて、面白くて、私の大切な人なんだよ」

「うう…。ああ…。！かす、み、私も…。大好きだよ!!」

私は香澄を強く抱きしめた。今までの寂しき、辛き、悲しき、全てが浄化されると願って、私はこの太陽のような存在を強く感じるために。

「ねえありさ、覚えてる？ 私と初めて会った時のこと。ありさは私を泥棒と勘違いしたよね。でも、ありさの星の輝きで、私はランダムスターにも出会えた。ありさがいなかったら、私はキラキラドキドキを目指すことなんてきつとしなかった。できなかつた。でも、今は違う。ありさが私のキラキラドキドキなんだよ」

「そつ… そんな、私なんて」

「だから… そんな寂しいこと言わないでよ。まあ、この間私もそんな感じだったから人のことは言えないんだけど… でも、本当だよ。ありさが、私の一番大切で、大好きな人。もちろん、ポピパの皆とかオーナーとかまりなさんとか、大好きな人はたくさんいるけど、ありさはそういう意味の大好きじゃないんだ。私のすべてを捧げられる、私の理想。キラキラドキドキなんだ」

「なんで… そんなに私なんかを好きになってくれるの…」

「私が好きになつたんだから、それでいいじゃん！ 自分では気づかないのかもしれないけど、私はありさが… 世界で一番大好きなんだから!!」

「か、香澄… !!」

私の閉ざされて凍りついた心が、太陽の輝きで溶かされた瞬間だった。ああ、もしか

したら私はこいつと出会うために今まで生きてきたのかもしれない。それほど、嬉しかった。涙が止まらなかつた。私は再び香澄を強く抱きしめた。

「ありがとう。香澄。お前と出会えて、よかつた。こんな私を好きになってくれて。ありがとう、ありがとう。……」

「ありさつ、ほら見て、夕日、すつこい綺麗だよ！」

私は香澄の指さす方角を見た。赤く染まつた太陽が、キラキラ輝いていた。

「そういえば、蘭ちゃんもこういう夕日好きだつて言つてたな。……」

「もう！ありさ、今は他の女の子の名前出すの禁止」

「なんだよそれ、超可愛いなお前……」

「あれ？お取込み中でしたか？」

驚いて振り返ると、おたえがいた。りみがいた。沙綾がいた。

「あつ……!?」

「ほう……有咲もなかなか積極的なんだね？」

沙綾がニヤつきながら言う。こいつ、後で覚えてろよ。

「ばつ……ちげえし!!ほら香澄、逃げるぞ!!」

「えつ……ありさあ……待つて……!」

私は香澄の手を掴んで蔵に走つた。満面の笑みで。久しぶりだなあ、こんなに心の底

から笑えたの。いつぶりだろうか。

でもな香澄、さつきみたいには、香澄に手を引かれて走り出す側じゃなくなつたつてことだ。これからは、私がお前の手を引いて走り出して、お前を幸せにしてやる。

こんな私を、好きになつてくれてありがとうな。

出会つてくれて、ありがとうな。